



## 第66回（平成23年10月12日）定例会の会員発表

## 「アイヌ語 Teyne 地名について」

アイヌ語地名研究会 渡辺隆氏

## 1 アイヌ語地名について

北海道文化遺産の1つに選ばれていますアイヌ語地名は、松浦武四郎の山川図に約1万ヶ所を数えます。アイヌ語地名の分布は、東北地方北部にも多数確認され、本州や九州の地名にも僅かながらみられます。また日本列島の外にあっては、サハリン（樺太）南部やカムチャッカ（千島）列島に多数みられ、沖縄や朝鮮半島にもアイヌ語によく似た地名があると云われます。

アイヌ語地名は、その土地について、地形、位置方向、動物、植物、鉱物、地質水質、生活、狩猟、祭事などの特徴を表していることから、土地の歴史を後世に伝える生き証人のようです。

アイヌ語は文字を持ちません。口承によって伝えられてきたため、その正確性に難点があります。アイヌ語地名は、次の要件が満たされ、その確定レベルが高いほど正確だと云えます。

- 音、意味、文法構造がアイヌ語として適切であること。
- 地理的条件や事実関係などの解釈に妥当性があること。
- 根拠となった場所や地形・事実などがほぼ確認できること。
- その地名が他の場所に類例があること。
- 従来の諸説に照らして適切であり、また一定程度の定説となっていること。

北海道内において現在用いられているアイヌ語に由来すると思われる地名を、これらの要件に照らしてみると、ほぼ確定できるものは全体の約3割ですから、よく判らない地名が多いのです。



## 2 文献にみる Teyne の地名

2-1 北海道に Teyne の単語を含む地名は、現在、つぎの5つあります。

## ① 札幌市の手稲

手稲の語源は、松浦武四郎の旧記や旧図〔丁巳日誌下〕〔丁巳日誌中〕〔西蝦夷誌〕に現れる「テイネニタツ」「テイ子ノタフ」という小川の名からでたもので、teyne-nitat（濡れている・湿地）と解釈すべきでしょう。

明治5年（1872）2月、旧仙台藩白石支藩の47戸241人が、発寒村（後の上手稲村）に入植しています。アイヌが呼称していた teyne の音をあて、「手稲村」の名が誕生することとなりました。〔手稲町史、手稲歴史年表〕アイヌは手稲山をタンネウエンシリ（長い・悪い・山）と呼んでいました。

- ② 湧別町のテイネ
- ③ 釧路町の天寧
- ④ 恵庭市の音江別 ヲトイ子ツフ（川尻の濡れているところ）
- ⑤ 苫小牧市の音羽 オテーネ（川尻の濡れているところ）

## 2-2 現存しないその他の Teyne 地名

- ① 石狩川河口のテイ子イ
- ② 寿都川のテイ子イ
- ③ 室蘭市のテイ子
- ④ 天塩川筋のテイ子メム
- ⑤ 旧夕張川筋（栗山町）のテー子ナイ
- ⑥ 濤沸湖浦士別川筋のテイ子イ
- ⑦ 沙流川下流筋のトテイ子ナイ
- ⑧ 御西川周辺（雄武町）のテイ子
- ⑨ 札文島鉄府のテフネフ
- ⑩ 黒松内町のテイ子
- ⑪ 士別市のテイ子メム
- ⑫ 根室市温根沼のテイ子ルケル
- ⑬ 樺太の多来加湖のテイ子トマリ
- ⑭ 択捉島の天寧

## 3 teyne の語源について

- ① teyne [自動詞] ○ ぬれる、ぬれた、ぬれている、ぬれた（ちょっと） ○ 汚す ○ だろだろしている ○ じめじめした ○ 湿地（の）、湿る、湿った
- ② Teyne-i [名詞] ○ 湿地
- ③ 類似地名 nitat [名詞] ○ 林間の湿地 ○ やち

（文責：舘岡良三）

## 手稲の発展に寄与した乙黒定七 ～ 3代記

富丘 齊藤隆夫氏



初代乙黒定七氏が、三樽別川沿いに「乙黒製油所」を開業したのは明治 35 年（1902）、109 年前のことでした。最近まで木造の工場があり、古い木製の立派な「乙黒製油所」の看板が掛けておりましたが、現在は取り壊され、マンションが建てられています。

初代定七氏は、郷里、山梨県中巨摩郡より一家のみならず、従業員とその家族を合わせた大移住を行ったそうです。当時、手稲の人々は、この大移住にびっくりしたそうです。

この頃の手稲は、前田牧場が開け、手稲鉱山の開発も進み、鉄道も開通しており、産業基盤も、ちくちくと進んでおりました。

乙黒家は、郷里で、菜種油の製造業を営んでおりました。菜種油は、食用油、潤滑油、灯火

用として用いられ、当時米国への貴重な輸出品であったため、原料の入手が困難な状況であり、初代定七氏は、品質の良い北海道産菜種に注目し、数年に渡り研究を行った結果、自ら北海道に渡り、製造することを決意したそうです。

三樽別に決めたのは、川の水が綺麗で、製造に適しており、川の流れを動力として、水車を動かすことができる。又、札幌、小樽への交通の便が良かったことなどが上げられます。

又、新川から見る手稲山が、郷里の釜無川から見る南アルプスに似ていたのではなかったか？

初代定七氏は、当時すでに還暦を過ぎており、二代定七（当時 23 才）と共に菜種油の原料を求め、事業拡大のため、大移住を行った事は、定七の気力と先見の明にすぐれた事業家であったと思われま

す。大正 2 年（1913）、住宅工場を全焼するという大火事を起こしながらも製油所を再建、ここに乙黒製油所の基礎が築かれたようである。

初代定七氏は、大正 12 年 83 才で逝去、又妻小仙さんは、陰ながら夫を支え 77 才で逝去されました。

二代目定七氏は、大正 11 年、43 才で「乙黒定七」を襲名、製油所経営の傍ら、昭和 2 年手稲消防団の前身の三樽別自警団を創設、昭和 5 年には、手稲村議会議員に選出され、地域のために全力を尽くし 3 期 8 年間務めましたが、昭和 13 年病のため急逝しました。

決して驕らず、謙虚で、仏様のように温厚で、寛容な人で、手稲の為に並々ならぬ尽力をした人です。二代目妻キクセさんは、男勝りの気丈夫さを持ち、議員活動などで家庭を留守にする夫を支えて工場を切り盛りし、経理面にも才があった大変な女傑で、女として、母としても見事な人生を歩いた人だったそうです。昭和 57 年 97 才で静かに世を去ったそうです。

三代目定七氏は昭和 15 年 28 才の時、「乙黒定七」を襲名。30 才の時、手稲村議会議員に当選、戦時下、軍需用の物資だった菜種油の製造は続けられ、昭和 16 年、17 年、18 年を第 7 師団に召集されるが、短期間で除隊となり、家業の菜種油の製造に励んだそうです。

戦後、本業の傍ら、村会議員として活動、昭和 22 年には副議長、同年手稲消防団団長、昭和 34 年手稲町議会議長、昭和 42 年 3 月 1 日、札幌市と合併、その後、札幌市議会議員として 5 期 20 年に渡り、市会議員を務められ、昭和 42 年には「札幌市政功労者」として表彰されました。

地元では、「手稲に乙黒あり」「手稲のドン」「手稲の殿様」などと称され、世のため、人のために尽くした真の功労者でした。特に消防団活動には、偉大な功績を残した人でした。

昭和 46 年、北海道社会貢献功労知事表彰、昭和 47 年には消防功労により、藍綬褒章。昭和 62 年叙勲三等瑞宝章と数多くの表彰を受けられ、平成 15 年（2003）91 才で逝去。明治 35 年移住から、109 年乙黒家代々、手稲の発展に努めた功績は偉大なものがありました。（文責：條野雄一）

### 次回予定

次回（12 月 14 日）は、石狩市郷土研究会の高瀬たみ氏の講演「石狩市のボランティアの現況」と、茂内義雄氏による「手稲史年表」の学習会を予定しております。

会場は、視聴覚室です。